

新約聖書注解シリーズ

ルカの福音書

1 - 10 章

ノーマン・クロフォード著

The Gospel According to

LUKE

An Exposition

by

Norman Crawford

新約聖書注解シリーズ

ルカの福音書

(1 - 10章)

ノーマン・クロフォード著

一節ごとの詳しい解説

伝道出版社

LUKE

RITCHIE NEW TESTAMENT COMMENTARIES

(What the Bible teaches)

An Exposition

by

Norman Crawford

Publishers

John Ritchie Ltd.

Kilmarnock, Scotland

EVANGELICAL PUBLISHERS

Tokyo, Japan

目次

はじめに	5
第一章	33
第二章	77
第三章	120
第四章	147
第五章	176
第六章	203
第七章	239
第八章	271
第九章	326
第一〇章	378

はじめに

著者

「ルカの福音書」の著者に関する証拠は「使徒の働き」と密接に関連している。どちらもテオピロという人物にあてて書かれたものである。ルカの福音書のほうのあて名は、テオピロが權威ある高官だったことを示しているが、彼については、それ以外のことはわからない。「ルカ」という名前は、どちらの書にも出てこない。けれども、使徒たちが天に召されてから今日に至るまで、愛された「医者ルカ」(コロサイ四・14)が著者であるというのが衆目の一致するところである。

エイレナイオスは紀元一八〇年、「ルカの福音書」と「使徒の働き」の両方をルカのものとした。このような外的証拠は、それ以前にもあった。マルキオンはこの福音書をルカの作とみなした上で、彼をパウロの同行者と特定した(マルキオンは紀元一四四年ごろ、聖書の教えと

グノーシスの教えを融合させたために除名された)。紀元一六〇年から一八〇年の間に書かれた「ルカの福音書への反マルキオン序文」によると、「ルカはシリヤのアンテオケの出身で、ひたすら主に仕えるために生涯独身、八十四歳でポイオティアで死亡した」という。この資料は興味深いものだが、神の靈感による書物としての權威を有しているわけではない。

ルカは控えめな人物で、「ルカの福音書」にも「使徒の働き」にも自分のことをほとんど何も記していない。コロサイ人への手紙四章七―一節の「割礼を受けた人」たちのリストに彼の名前が含まれていないことから、彼は異邦人だったようである。ルカが書いた福音書は、四福音書の中でいちばん長い。また、「使徒の働き」も含めると、新約の著者たちの中で、いちばん多くの部分を執筆したことになる。筆者が考えているとおり、彼が異邦人としたら、彼は比類のない栄誉を受けたことになる。聖書全体の中で唯一の異邦人記者である可能性が高いからである。

ルカの著作は文学的にもすぐれたものであり、彼が教養のある人物だったことを示している。ある著者によると、ルカは文体にも構成にもすぐれたギリシヤ人で、自分の文体を変えることによって、どの場面も生き生きと表現したという。ルカがギリシヤ語に堪能たんのうであったことを示す証拠として、彼の序文が古典主義的な洗練された文章であることを指摘する言語学者は多いが、このことは彼の著作全体からも言えることである。ルカだけが用いている単語は三百

近くあり、しかも、その多くが一度しか出てこない。その中には、よく知られた単語を組み合わせてできた複合語も含まれており、ルカの語彙が非常に豊富だったことがわかる。第一章には、この福音書にしか出てこない単語が二十四も用いられている。「使徒の働き」の二七章には、ルカだけが用いている単語が七十ほど出てくる。

パウロは、医者であったルカを立派な同労者とみなして格別に愛した。ルカの医学用語については、いろいろ言われてきたが、そもそも、この時代に専門的な医学用語があったのかどうかもわからない。けれども、彼が医学に関心があったことを示す証拠は十分にある。それは、誕生に関する記事の書き方や「ひどい熱」(四・38)、「全身らい病の人」(五・12)、「十八年も病の霊につかれ、腰が曲がって、全然伸ばすことのできない女」(一三・11)といった表現に見いだすことができる。

ルカは歴史家として非常に尊敬されている。その記録が驚くほど正確で、地理学的にも正しく、王や為政者たちの称号にも間違いがないからである。ウィリアム・ラムゼー卿はルカの福音書の信憑性を疑っていたが、生涯にわたって考古学を研究するうちに、この福音書の地理的・歴史的記述の正確さを認めるようになった。このことは、聖書の無謬性を認めている人にとって当然のことである。

ルカとパウロ

「使徒の働き」には、主要な登場人物が三人称から一人称複数（「私たち」）に変わる場面が四か所ある（一六・10-17、二〇・5-15、二二・1-18、二七・1-二八・16）。それらの箇所からわかることは、まず、ルカがトロアスでパウロ、シラス、テモテと合流して、ピリピまでもに旅をしたことである。パウロとシラスが捕らえられて地下牢ちかろうに押し込められた場面です。三人称に戻っていることから、ルカが投獄されなかったことやテサロニケに行かなかったこと（使徒一七・1）は明らかである。ルカはそのころピリピにとどまっていた、と断言することはできないが、その可能性もある。七年後、彼はパウロといっしょにピリピから船出して、トロアス、ミレト、そしてエルサレムへ行った。パウロがカイザリヤで投獄されていたころ、ルカがその二年間をどのように過ごしたのかはわからない。けれども、パウロに同行してローマへ渡ったことはわかる。彼はローマへの船旅、あらし、難船の場面を生き生きと描いている（同二七章）。パウロは、その生涯の終わりに、「ルカだけは私とともにおります」（Ⅱテモテ四・11）と愛を込めて書き記した。

「愛する医者」（コロサイ四・14）と呼ぶことによつて、パウロはルカに対する感謝の気持ちを表している。おそらく旅行中も投獄中も手厚い看護を受けたのだろう。ルカは医師としての

技量を示したに違いないが、彼の奉仕はさらに広範囲のものであった。彼はパウロの「同労者」(ピレモン24)であり、そのうえ福音書記者として、訴求力に満ちた伝道的な福音書を書いた。ルカの福音書とパウロ書簡の内容の違いを指摘する人は多いが、その違いは目的の違いによって説明できる。一方、パウロがみことばを宣べ伝えている場面を読むと、ルカが扱っている資料との類似点はほとんどないように思える。それゆえルカは、パウロに依存したのではなく、むしろ異邦人に対するパウロの伝道方法を熟知していたに違いない。このことはルカの資料の扱い方に確かに反映されている。

筆者は伝道者として四十年以上、福音書集会で語ってきたが、自分のメモを調べたところ、ルカの福音書を開いたことがいちばん多かった。

執筆年代

「使徒の働き」に「ルカの福音書」のことが出てくることから(使徒一・1、2)、ルカの福音書のほうが先に書かれたことがわかる。ルカが紀元七〇年までに執筆を終えたのも確かである。エルサレムの陥落や神殿の破壊といった出来事が、まだ起こっていないからである。また、クリスチャンであるというだけで犯罪人とみなされたような事件は、どちらの書にも記

録されていない。エルサレムのユダヤ人議会や各地のユダヤ人社会が宣教者たちを迫害したことは記されているが、ローマの高官たちは使徒たちに対する訴えをしばしば退けた。このことから、多くの学者が、ルカの執筆年代を紀元六四年以前と考えている。ローマの大火が起こって、ネロがクリスチャンを弾圧し始める前である。

「使徒の働き」の最後の場面で、パウロはローマで囚人となっているが、ひとりの兵士に監視されているだけで、自費で借りた家に住むことも許されている。「使徒の働き」が書かれた後、パウロは釈放され、その後、再び投獄された(最後の投獄)。紀元六二年以降に起こった出来事は何も記されていない。これらのことから、この福音書は紀元六一年ごろに書かれたようである。それより後の年代とみなす理由は何もないようである。一方、パウロがカイザリヤで投獄されていた二年のうちに書かれた、という興味深い意見もある。

共観福音書

マタイの福音書とマルコの福音書とルカの福音書が共観福音書と呼ばれるのは、資料や題材の多くを共有しているからであるが、ある著者が他の著者に依存したという証拠は何もない。マルコの福音書の大部分はルカの福音書にも出てくる。ルカの福音書は一一四九節あり、その